

は し が き

言語センター長 君 羅 久 則

言語センター広報 *Language Studies* の第12号をお届けいたします。例年3月末にお届けしておりましたが、今号より発行時期を2箇月早めて1月に発行することとなりました。当言語センターも創設12年周年を迎えたこととなります。この間に、教職員スタッフの充実、2号館の創設など施設・設備面での拡充も実現してまいりました。一方、IT革命の時代といわれるようになって久しく、最近では「CD、MDの機器はあるが、カセットテープレコーダーは持っていない」というような学生の声も聞かれるようになりました。幸い、本学言語センターはCALLやマルチメディアホールなど、教室のマルチメディア化を早くから実現して参りましたので、かなりの程度、新しい時代に対応しえるように改善されているといえますが、今後、教材やライブラリーの資材などについても、新しいメディアでも利用できるように充実を図っていくことが大変重要であると思われまます。このようなソフトウェア面も含めた教育環境の整備は教授法や学生の学習の仕方にも様々な可能性を生み出し、FDの改善と発展に大きく寄与することにもなるからです。

ネイティブ・スピーカーによる外国語会話の公開講座は、今年度は4講座が開講されました。春から初夏にかけて、外国人教師マーク・ホルスト氏による前期英会話講座、本学ロシア語の非常勤講師のアレクサンドル・スペヴァコフスキー氏によるロシア語会話講座、裴崢教授による中国語会話講座、秋から初冬にかけてはブライアン・ペリー氏による後期英会話講座が実施されました。この公開講座は、言語センターが平成5年度から毎年開催しており、今年は11年目ということになります。英会話講座を除いて受講者は必ずしも多くはありませんが、全講座とも熱心なリピーターもおり、受講された方々にはたいへん好評でした。

本学の教官と高校や中学校で教員をしている本学卒業生とで作る教職研究会の第16回大会が平成15年12月13日に本学学生会館多目的ホールを会場として開催されました。学内外の教官・教員、学生約50名が集い、苫小牧駒沢大学の谷村善通先生が「教職の魅力」と題して講演を行ったほか、研究発表とシンポジウムが行われ、盛会でした。

言語センターにとっては大変喜ばしいことですが、平成15年4月1日には3人の教官をお迎えし、久しぶりにフルスタッフが揃うことになりました。応用言語学部門所属のショーン・クランキー助教授、個別言語部門英語系所属のダニエラ・カルヤヌ助教授、それに個別言語部門英語系所属の横村栄美助手の3教官です。

さて、言語センター所属の教官の海外出張と研修についてご報告いたします。個別言語部門英語系所属の大島稔教官は、平成14年3月21日より平成15年1月20日までの間、ロシア科学アカデミー極東支部・太平洋地理学研究所・カムチャツカ支局にて在外研究に当たられ、引き続き平成15年4月10日から9月15日まで同研究所にて海外研修に従事されました。さらに11月2日から翌平成16年1月31日までの間、同所に海外出張されております。個別言語部門ドイツ語系所属の副島美由紀教官は、平成15年5月30日から6月4日までゲーテ・インスティトゥート・イスタンブールに海外出張されました。外国人教師のブライアン・ペリー教官は、平成15年3月5日から同19日までと平成15年12月18日から翌平成16年1月13日までの間、英国ウォリッ

ク大学に研修に出掛けられています。応用言語部門所属の高井收教官は、平成15年3月2日から6日間に亘ってスリランカに、また、平成15年8月2日から同8日までと、平成15年12月22日から翌平成16年1月7日までの2度にわたり、アメリカ合衆国ポートランド州立大学に研修に出掛けられました。個別言語部門中国語系の裴崢教官は、平成15年3月19日から4月6日まで中国・北京師範大学並びに雲南大学に、平成15年9月3日から同21日まで中国・武漢大学等に、さらに平成15年12月31日から平成16年1月25日までの間、中国・北京大学並びに山西大学にて海外研修されています。個別言語部門日本語系の高野寿子教官は、平成15年7月19日から8月10日までアメリカ合衆国・ミシガン州立大学にて海外研修に当たられ、平成16年1月7日から6日間、アメリカ合衆国・ボストンにて研修されています。個別言語部門英語系所属のダニエラ・カルヤヌ教官は、平成15年7月17日から7月28日までスペインに海外出張されましたし、同部門英語系所属の吉田直希教官は、平成15年9月22日から9月30日までアメリカ合衆国・スタンフォード大学にて海外研修を行っております。また、外国人教師のマーク・ホルスト教官は平成15年6月24日から7日間、連合王国カーディフ大学にて海外研修されました。

例年の通り、今年も学生の活躍で特記すべきことがありましたので、お知らせしておきます。札幌姉妹都市協会主催の第22回ドイツ語暗唱大会(2002年10月16日、札幌国際プラザビル)で本学の3年生が努力賞(4位)を受賞しました。また、英語では、相変わらずTOEFL、TOEICで好成績を収めた学生も多数いますし、また、STEP(財団法人日本英語検定協会)の実用英語技能検定の1級合格者も出ております。昨年度も書きましたが、これらは、現時点では、旧カリキュラムの必修20単位の遺産と言うべきかも知れません。しかし、新カリキュラムでは、4年間を通じて、外国の言語や文化の学習チャンスが一層拡大されていますから、更に深い異文化理解の教養を備え、広い視野を持った、「国際的教養人」とも言うべき多くの学生が輩出することを期待できると思われます。

最後になりますが、本広報の第6号(1998年3月)に発表された、個人の名前を対象としたA. B. スペヴァコフスキー氏の論文(“Об особенностях этнической ситуации в бассейне Нижнего Амура по некоторым данным антропоники (на примере амурской семьи сотрудника Петербургской Кунсткамеры Чунера Михайловича Таксами)”)中のプライバシーにふれる記述について、対象となったCh. M. タクサミ氏本人から論文が寄せられましたので、本誌の投稿規程に照らすと例外的ですが、一つの反論の形として本号にその論文(“За право быть равноправным”)を掲載します。